

翻
刻

『
稲葉
佳景

無駄安留記』

邑美郡・岩井郡

- 一、私に句点、濁点を加える。原本のところに濁点を加えられているがそれらとの区別はしない。
- 一、漢字・仮名とも、原則として現在通行の字体に統一する。
- 一、文字の大小の比率、配置は原本と異なる。
- 一、改行は、上巻・下巻は原本のまま、拾遺巻は原本によらない。
- 一、手擦れ・重ね書きなどによつて判読できない文字は■によつて示す。
- 一、字形は明確であるが、判読できない文字は□によつて示す。
- 一、判読に疑問のある文字は「」でくくる。
- 一、絵とその題を四角の枠内に掲げる。配列は原本に従う。絵に書き加えられている説明のうちの主なものも枠内に記す。

邑美郡

【上巻】

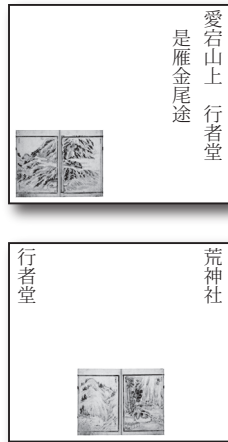
邑美郡湯処

如意山養寿院 薬師堂弁天祠 本尊地藏尊

境内

臥雲松 当府第一の名株なり。巖上に根ざして堀池に匍匐

す。数十の枝をつかせ、緑色四時おもしろし。前に石碑あり。



岩がねに生ぬる松も露霜を

くにせんねむの色とこそ見れ

後山半日亭 朽「木標」は正牆薫先生筆

嘉永年間建之。遠望無双の地なり。西は角盤峯天外に秀

で鷲峯人阪の高山、湖水、北に蒼海漫々として、高草法美の

野原山川、言に尽しがたく、風景絶妙、中春の頃風騒雅士こゝに遊燕す。桜花最面白し。

遠近の詠めもかすむ春の日や

花のちりげの遅く成けむ

同 木山牛頭天王 諸人尊信す。半日亭の上、眺望面白し。

嘉永以後、日々増て莊嚴をくはふ。

錦なる戸ばりもいつか散はてゝ

冬の木山ぞ肌さむげなる

同 愛宕山金剛院 真言 地藏大権現

祭式六月廿四日。諸人群参す。山上遠望無双なり。

堪かぬるあつき日もまた防ぐらむ

愛宕の峯は涼しかりけり

同 荒神社 祭神素盞烏尊稲田姫命なり。祭日正月廿八日。

養寿院の下、岩壁の側に鎮座。是湯所氏神なり。

境内瀑布 堀泉水なり。

春毎に草はもゆれどみやしろは

すゝれもやらぬ荒神の山

同 行者堂 役小角神変大菩薩

峯ならば鬼もつかはん家近き

こゝでは行者堂もいはれぬ

同 丸山弁慶三ツ子岩 山下牆の外に在。頂に脚痕あり。

いつのまにさまへまいたか弁慶の

あしの痕とはよふみつ子岩

山屋敷の峠右の方に石祠あり。道祖神と崇る。かの大草鞋を掲る。

五月雨や草鞋をからむ阪の道

是より坂を下りに、左の道を二三町、山股に大盤石畠中に在。古墳也。俗云山名氏の墓なりと。不詳。左右に両区の墓あり。殉死と見ゆ。

嘉永の頃、諸人靈驗ありとて参詣夥し。百病を祈るもおかし。

大いしや誰が仮名よみを誤りて

病のためにたのみ来ぬらむ

同 円護寺邑 仏徳山円護寺 本尊大日如来 観世音

是、往古、産見長者一子を授りし靈仏なり。

御仏の光や常に照すらむ

このよの闇とくらき後の世

境内 瘡守稻荷明神 開願に土団子を捧る。

こゝに村雨をおやめて、しばしいこふて

村雨の降るも他生の円護寺や

我に宿かせかさもりの神

同 後谷時雨亭 天保年間 某の閑静を楽しむ地なり。

南都三笠山を真似たる風景あり。松杉蒼翠の中に、小亭を構えたり。洗耳ばかりの溪水も流る。遠望奇妙なり。

散かゝる水を茶に酌む谷の庵は

花に酔また花に醒むらむ

同 古墳 村谷田圃の中にあり。谷奥の方なり。是吉川氏の古墳也と。

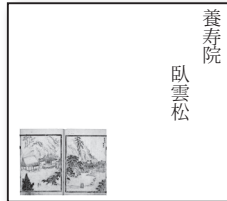
苔むしろ人まち顔の古づかに

きてなくものは谷の鶯

同 左の山の端に石祠を祭る。瘡の神なりと。

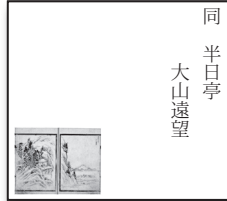
養寿院

臥雲松



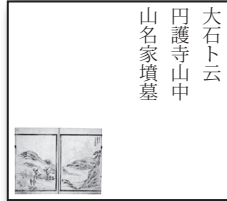
同 半日亭

大山遠望

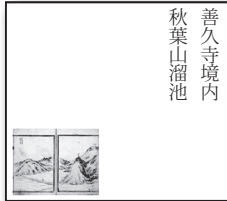


大石ト云

円護寺山中
山名家墳墓



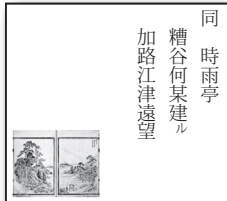
善久寺境内
秋葉山溜池



円護寺堂
瘡守祠



同 時雨亭
糟谷何某建ル
加路江津遠望



同 規外キガイ禪師開基がいの庵 仏舍利を納る。

御仏もしやくしと聞けば我つみに

沈むと知らばとく救はなむ

同 石山 切石を巧。此山谷所々に穴あり。夏の日も中に居れば

涼冷として氣疎し。

石山をげむおう持て打見れば

片われ月ぞ空に残れる

同 善久寺秋葉大権現 山の端に堂あり。山下溜池景色よし。

是頂より、堤の緑草水上の清風、佳景もつとも面白し。

向の山下に石山路あり。又水際に水玉草生る。奇なり。

同 雁金山 丸山後。往古、砦の址なり。高峯にして遠望無双。

帰るべき時を忘れて霞にも

幾春なれぬかりがねのやま

同 戦場ヶ平 ナルヒヨドリヲ 尾 正浄寿寺の上、孤山なり。府下高草及遠近の山々

湖海眺望最勝なり。是往古、奈佐日本之介・塩谷周防守戦死の
址なり。山下の川童地藏即古墳の シルシ なりと。この頂に置酒し

て脚を息ふ。

欲深き人に見せばや千町田に

黄金をしける菜の花のころ

同 念仏橋 覺寺の路にかける小橋

極楽へゆく念仏の橋ならば

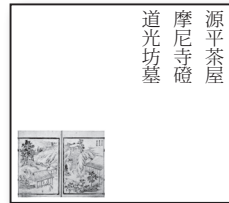
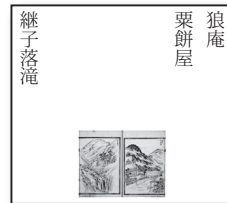
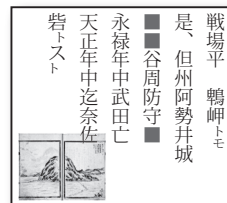
渉るもふむも土そくぼだいか

同 覺寺邑 五智庵 五智如来を安置す。桃花繁し。

美しくしき尼の住からみな人の

もゝのあたりに見とれぬる哉

同 狼庵と云。鯖如来を安置。是恵心僧都作なり。



前に栗餅。名物なり。

人喰ふ狼庵の名にも似ず

衆生を救ふ仏ますとは

同 ぼじざか路 左の山道をゆく。峻くして難路なり。

是、岩井郡途なり。

かくじさえこまりしものをまたこゝに

問ふ人もなきぼんぢざか哉

同 継子落瀑布

御仏の誓ひに洩れぬまゝ子なら

とくひき上よたきのしら糸

是より狼谷、或は雞山を経て、漸く源兵衛茶屋に到る。

磴を登れば当国第一の霊場喜見山摩尼寺、堂宇数多、遠近の貴賤参籠不断。本尊は帝釈天、是往古彼産見の長者が安堵する所なり 縁起二詳也。天女の貌なり。

地獄から鬼の来ぬまに帝釈を

頼むで罪のせむたくをする

同 境内 秀衡杉 是陸奥守藤原秀衡、重病平癒の開願

に樹らるゝ処なりと。今雷火に焼て枯木たり。可惜。近年伐て、株のみを残せるも、やがて朽果なん程思ひやられてはかなしや。

朽ぬらむ其名は四方にみちのくの

植にし人を忍ぶなみだに

是より山途を行て凡十町ばかり、左の山谷をじくゝ谷といふ。

右の路をゆけば、矢谷・八重原など、それより数町、又左の方を登り、齒朶荊棘をわけて、九曲して奥の院の大岩

に到る。まことに巍々たる巖壁反覆して翠苔蒼々たる巖上

に弘法大師不動明王を安置す。其側は数千歳の松柏鬱茂たる岩下に小祠あり。木仏の破壊したるを安ず。奇絶の大巖なり。

草ふかきじくゝ谷はさもなくて

あなおそろしき奥の院かな

是より又小篠・齒朶をわけのぼれば、狙ならましかばとおもふばかり、山深く、樹の枝荊棘を潜りて、漸く峯の立岩に到。岩下に財の河原とて小礫を積だり。此処より岩角を攀り

からうじて頂に登れば、大日如来石尊を安置す。こゝにて海陸遠望、絶景筆に尽しがたし。是建石とて、海上の漁舟目的とするよし。

春霞たつとはすれど中ゝに

たちもおよばぬ峯の立岩

同 矢谷山上燈明岩 道■の石尊あり。此岩上に時として夜

燈火を見。怪異のことなり。

紅つゝじ燈明岩のあたりとて

木の下闇を照してぞさく

同 児ヶ松 源兵衛茶屋の向、仁王門の左の路を下りて、谷よりまた登ること二三町、頂に在し由。今は名のみなり。湯山池の眺望無

双の佳景なり。

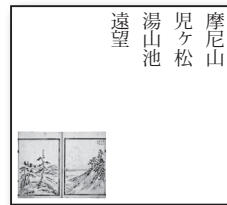
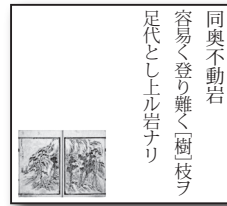
おのづからはゝその風も通ふらし

尾上に児がまつと聞より

同 源兵衛茶屋 蒟蒻^{コンニャク}の田楽、名物ながら味なし。山谷と

いひ精進^{セイジン}なれば、是にて弁当^{トウ}の用を調ふるなり。
いにしへを捨ずにさすが田楽の

黒の串竹幾世経ぬらむ



是より本道を、丸山にはじまりて、川童地蔵、是奈佐の一族古

墳の■なり。昏迷の俗みだりに礫を打て、破損毎々。奈佐日本之介は

豊公采伐の時滅亡。

うち砕く罪にならなくへ沈みなば

かは子地藏やしりご拔らむ

同 笑谷 又笑岩とも

鶯も山の股からほゝほゝと

いふおかしさにみなわらひ岩

同 浜坂

大応寺之観世音堂は大同二年開基^{延鎮僧都。 作仏也。}

境内桜樹数本あり。中春の頃は遊客不断、佳景不尽言葉。堂宇

最美麗なり。古名水月庵。縁起は拾遺書詳なり。

観音の御手の弓矢を春の日の

いるさえおしき花の上かな

水上弁天嶋 千代袋両川の合る沖なり。老松茂りし中に鎮

座。奇岩面白し。

嶋姫の水の調べにあはせつゝ、

琴ひく松の風ぞ涼しき

是より浜をさしてゆく路に紫山とてあり。こゝにて、村童の松^{セウ}露^ロを採^{トリ}て籠^{カゴ}に入^イれてもてるを見て

うなひ子が提籠^{サゲコ}に千世や満るらむ

浜松がねの露をひろふて

荒神山

御建の松叢^{ムナガリ}生たるさきは、平沙渺々^{ヒヤウ}として、向は江津

加路の村落、商舶遊舟眼をおどろかすばかり、彼方は

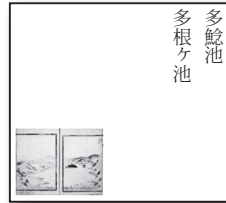
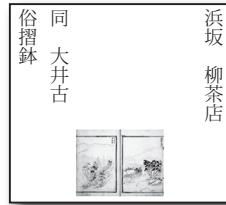
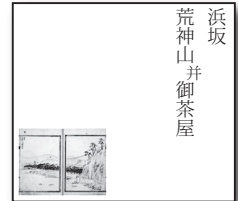
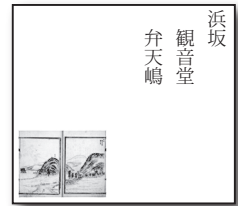
方の川岸に、釣人数多、漁舟・網打など数しれず。

取おとすはづみにいふか南無三宝

荒神山の磯のはぜつり

とりに来る鬼もなければ川岸の

ひたひにめだつ瘤柳^{コナ}かな



同
大井古小井古 今、大摺鉢小摺鉢と云。昔池なりし由。東浜の口

柳茶店の後の方なり。寛文年間迄池の形在之。

誰が何をするとも知らず春くれば

れんげも見ゆるはまのすり鉢

同
多稔ヶ池 多鯨池共。ぼじ阪より臨めば、碧水漫々として

風景かぎりなし。弁天嶋・柿嶋など、殊に面白し。こゝに

瓢飲を汲んでしばし憩ふ。

池の名の鯨は知らず最ひとつと

人をおさえるひやうたむの酒

同
久松城墟 是天文年中鏹初する。山名源十郎老臣田原其繩

張する。家老武田豊前守、同嫡子同美作守高信在城す。同山名

中務太夫豊国法名禪高、同豊弘。天正九年落城。宮部禪定防在

城。邑美高草法美但州二方共合四万五千石。後文禄四年より宮部

兵部少輔伯州倉吉に移る^{先代}。慶長五年倉吉^時滅す。池田備

中守長吉同十九年同備中守長幸在。後元和三年備中松山^ニ移。

元和三より因伯兩州主松平新太郎光政、宝永九年迄。備前岡

山に移る。松平相模守光仲公代々。

同
山後豊公^方陣跡 水戸谷より百谷へ越路の左り。岑に方三十間

余丈余の高塹を四方に筑。乾堀二ツ入口老松叢生たり。是天正

年間豊公来伐の時筑たり。今は小笹原松林となりて鬱

茂たり。

ばちならぬ二ツの脚でどんとんと

のぼりて見ればたいこうがなる

【下巻】

邑美郡 同靈石山最勝寺 真言宗 京仁和寺末 和銅年中
元三大師開基

境内 蒲冠者範頼公古墳 山裾の田圃の側に在 法名頼賢
ト改号

遺物 太刀 鎧の類 馬具 本尊薬師如来 行基作

鎌倉の闇を凌ひて郭公

片山蔭の月に啼なり

境内 水神社 当山氏神 石神門有 荒神社は山上森の中

神の御子石 裏山端の方松樹の下に在。神代より伝。

山風を谷間のすゞに音たてゝ

雲の袖ふる神のみこいし

遺物 紺紙金泥ノ大般若經 範頼自筆

什物 大般若經 五十卷 元三大師筆 十六善神像 唐惠果和尚筆 灌頂宝冠鉄鉢 テツハチ

十六善神画像は密画なり。極彩色経巻は慈恵大師筆。尤古物なり。

宝冠は今五片残り。又金焼付地紋有。同鉄鉢庭朽たる。尤古物にて

彼食米を炊し物故哉。最古雅なり。蒲公 法名頼賢 自筆般若經

紺紙にて写たる二枚。太刀は無銘一振遺す。先年瑞徳院 慶邦卿の時

有銘の太刀一振 計残ルモノヲ 献じたりと云。古鑑一 螺点 古鞍など

遺れり。○又明治九 丙子七月末に蒲公御墳の石垣崩て是を筑

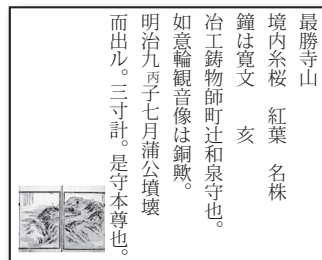
改む時、中より如意輪観音の銅像を掘出せり。丈三寸許、是公の守

本尊なりしにや。衆尊信す。又此山裏八東方ノ裾に五六尺許の岩

ニツ立たる処、弁財天とて今年夏衆人群参すること数千万な

りける。米岡より出茶舎両三家、其外ニも夥しく賑ふ。神の御冠

石は河原村の方 向山の半腹に大石見ゆる物なり。樹は枯てなし。
慈恵大師は今明治九 丙子年迄凡八百九十五年也。是元三大師なり。
又蒲殿当寺 潜居の時、討手として梶原等来る時、この山下にて
鮪の頭を焼て火葬ニ託したるは是建久四年、今年迄凡六百八十
年許。又境内糸桜は 村豪農三木某、庭中に糸桜の大株有。
是本は当寺の種なる由を伝て、後に 頃や、又当寺江若種を
植継しものなりと。又紅楓の老株偃たるものあり。偕又蒲公の
御子孫相続て国侍ニも吉見氏を号し、出雲にも在。皆大正「之」
年間迄も武名あり。巨濃郡岩常二上城ニも在し由。是大平記
古書帖も年経盜難火災に度々遇ふ故、咸々滅亡して口碑
のみ残るぞ惜むべし。



最勝寺山 境内糸桜 紅葉 名株
鐘は寛文 亥
治工鑄物師町辻和泉守也。
如意輪観音像は銅鍍。
明治九 丙子七月蒲公墳壞
而出ル。三寸許。是守本尊也。

【拾遺卷】

邑美郡鳥取久松城は、天文十四乙巳二月中旬、初して^{布施}山名源十郎豊勝老臣田原某繩張す。同老臣武田豊前守、同嫡子美作守高信在城、後^二山名中務太夫豊國^{法名禪高}同。豊弘、天正九年為^二豊公^一之^一少輔^{武部}共^二落城^ス。代而宮部^{カワリ}禪定坊、高四万五千石^{高草 邑美 合領}。後^二伯州倉吉^ニ移る。同兵部少輔^{文祿 四年ヨリ}慶長五年滅^一却於此^一。慶長六年^{辛丑}の年より池田備中守源長吉、同十九年同備中守長幸在。元和三年移^二転^ス備中松山^ニ。元和三年より松平^{本姓}新太郎源光政公在城、寛永九年移^二転^ス備前岡山^ニ。在城間。同十年より松平^{本姓}池田相模守源光仲公、代々因伯兩州太守。可惜、明治年間之改革^{カイカ}空城となる。依て予が輩得^ル登山^ヲ。途九曲旋転^{セリ}、郭内有^二清井^一。故^二名城^一矣。久松山ノ頂^{イタキ}天守台石垣之上より遠近眺望無双。^{ユタカ}雲を踏霞を喰ふ山人の其数にしもけふは入にき。

同麓^{フミトモシノテ}楓亭^{フミカスミ}紅葉御殿ト云。萩も多株植之。小亭雅趣あり。
・見る人におのが錦を奪はれし昔やいかにかへるでの色^{イロ}

同後山^{タイイワトリテ}豊公砦^{タイイワトリテ}太閤^{カミ}方平と云。百谷路の在^レ側^ニ。高岑也。
・ばちならぬふたつの脚でどんぐりと登て見ればたいこうがなる

久松城天守櫓
河海遠望
天文十四乙巳年
二月初築造。
布施城主山名
左馬頭誠通
家老田原某
奉行。後武田
又五郎在城。
脚下^二鶴尾・浜坂・
代々山及荒神山
東浜・加路浦港・
鳥ガ嶋



久松城中櫓亭



豊公砦
俗太閤ケ平ト号。
・ばちならぬ
ふたつのあして
どむんど
のほりて見れば
たいこうがなる
無庵



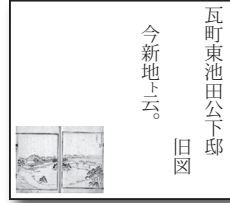
鳥取瓦町池田老岐^{イキ}守殿下^{ドン}邸遊館は^{ヤシキヨクハシ}年間草創^{ハジマル}。方数十町、中に堀池圍五六町、中嶼弁財天祠あり。水上には鳧鴨雁遊泳し、館下小艇を繋ぎ、向に稻荷の杜、老松鬱茂とし、左に祠、老杉蒼翠たり。小圪を涉れば、桜樹彼此に植て、馬場有。側に径草花競ふ。土筆に脚のふみどなきまで、左右の田野菜花金を敷き、春日壯観風韻最勝たりしも、世の変革に衰廃して、今は青樓戯場の屋舎軒を競ひ、艶色往昔に引替るも最可^レ惜。其形ち僅に残しも、明治六癸酉の火災に灰燼となりてなし。稻荷の丘も漸々に取崩して其形を失し、往昔は如月初年には市中第一の祭りなりしも、今は絶てなし。桜樹も掘捨て、今は纔に一二を遺す。門前の並松は早くに掘取、側に川を切込たり。池の水禽は鼓琴の響に慨然として飛去。家鴨是に代りて棲す。嗚呼盛衰眼前に膽て泣涕多し。悲風袂を湿するばかり、花美は昔に百倍し粉黛あたりに輝くと雖、心有もの、倚べき場にあ

らず。松琴鶯歌は唱妓の鼓弦に圧され薫態芳姿は徒に戯場傀儡に奪はる。其面白さは勝るとも其さまは遐に劣れり。
・鼓草たんぽちと鶯の歌に合せてうちの野に咲

瓦町東池田公下邸

旧図

今新地下云



補陀洛山慈眼寺観音院は鳥取権現道也。因幡順礼第一之札所とす。
堂宇莊嚴美也。本尊観音大士、小堂弁財天を祭る。小堂は弁天。
境内岡本応申碑、左方ニ在。銘ニ曰、先生姓岡本氏、名良碩、号ニ応申ト。備前人也。自レ幼キ作ル俳歌、又名ニ茶技ニ詠曲。長師ニ事フ鳳鳴舎白翁ニ。遂ニ継翁之縁ヲ、一時称スス技之宗匠ト。時々来遊フ于因藩。縦徒百数十人アリ。文化丙子之夏累病ニ、門人午睡一片扶持シ、送リ到ル于備藩。後八月四日卒ス。時享年七十有八。臨死自ラ書ス小序並辞世ノ句ヲ。
云

百年撰字

文政壬午中秋之日

社中建焉

天一を生じ二三を生じ三万物を生ず

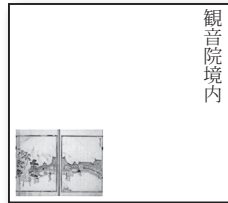
世界みな月雪花の外はなし 上池館応申

○立川二丁目子安地藏堂

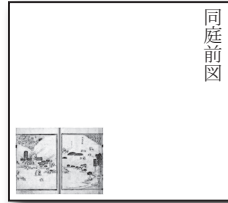
今は庵寺にて、尼の住居なり。此庵ノ仏前賽銭箱は、姥の口あきたる処より、米銭を入れて謁す。世俗米囃婆婆と呼ぶ。是三途の姥を表したるか。往古より斯の如しと。

・ 同源太夫松 今は枯てなし。世俗山の号とす。谷の東方高き処、雨乞の処あり。早には修験 院上りて祈る。

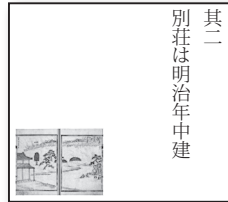
観音院境内



同庭前図



其二
別荘は明治年中建



同 大宝山芳心寺 法花宗

池田 称松平 相模守光仲公御室芳心院殿廟。

梵宇往古莊嚴者 大火ニ焼失。明治年間、品治村一乗寺本堂を移建而莊嚴整。本尊鬼子母神。境内法経塔者、安政五戊午年、世日透上人、八上郡最勝寺山谷ノ以ニ自然石ヲ建レ之。題目は京師本国寺 大僧正自筆也 施主者。小堂、大黒天・三十番神、築山者山本宗珉造。同塔中本慈院旧上地今芳心地而、本妙庵と号。元祖円華坊日春法師、天文廿二甲寅年二月廿一日寂。其後 世日宥上人、本妙寺ト改号、転住於当地ニ寛文九己酉。又改号本慈院。小堂妙見大士を祭る。築山当藩山本宗珉造之ヲ。坪山本ト云。知行 百石。極茶道築山之妙術ヲ。当市中数所造立甚衆焉。
・谷深く岩山高き貌にも造りし人の心をぞしる

○^{マナタニ}樽谷神社東照宮大権現は、寛永年間池田氏松平相模守源朝臣光仲公初而草創。莊嚴美麗。別当大雲院^{天台宗}神職は小宅市正守^{二護之一}。年間、銅燈籠を二対献之。毎年四月十七日祭礼。後有^レ故九月十七日^{ニ定ル}。太夫家より石燈籠を献、数十箇路傍に連立す。隨身門、神樂堂、本地堂、莊嚴美を尽せり。

大宝山塔中本慈院庭
山本宗珉作



其二



其三 北方
鎮守稻荷社



大宝山芳心寺



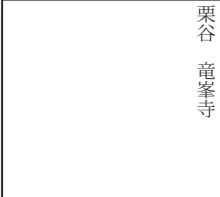
宝山芳心梵舍庭山
高明純一之図
山本宗珉作
池象^レ鶴^{今潰}。



邑美郡樽谷東照宮神門



栗谷 竜峯寺



同 竜峯山弘善禪寺
庭坪



丸山後^{カリガタラ}雁^{カリガタラ}峰^{カリガタラ}岩^{カリガタラ}墟
塩谷周防守在岩ナリ。



浜坂圃中大祠



同丸山河童地蔵
是鴈尾ノ岩ニ
桶竈テ戦死シ
タル塩谷周防守
奈佐日本之介ガ
墳墓ナリ。天保ノ
初迄ハ如図アリ
シガ、近頃破損
而石尊ノ小像
ヲ纔ニ残ス。往古
ノ大像ニ不有。鳴
呼可歎。



○邑美郡浜坂^{ツツパン}圯^{ヒトツパン}は、往古独橋なりしを、当村某往来危きを歎き、自力不能^ジ、他力を以せんと欲す。時に飼犬^{カイイヌ}のよく人意を悟るあり。某之に愉して曰^{サト}、汝よくきけ。我年来、此独梁^{ヒトツパン}を土橋^{ツツパン}になし万人を快く涉んとす。依て頸^{コウ}に囊^{フクロ}をかけ、途^{ミチ}に佇み、旅人に銭を乞ふべしと。犬尾を振て諾す。翌朝より路頭^{ヨクテウ}に出て行人の裾^{ユヅ}を啗^{クハ}て銭を乞^コ。不^{ザレ}与^{アタ}ば離^{ハナ}さず。一銭積^{センツム}で数百^{スウ}となり、終に圯成就^{ツツパン}したり。其犬死^シて後、祠^{ヤシロ}を建て路下田圃^{タンボ}の旁^{カタハラ}にまつる。犬の秀倉^{ホクラ}是なり。
・人の為に橋^{ハシ}を掛^{カケ}たる犬もあり人わづらわす人や何なる

浜坂観音堂 以前は水月庵と号。是も後の名にて、始めは貞享元年の頃、当村民此辺を掘て大朽木を得たり。此木、性有て人の手脚の形有。衆皆集て見れば古き仏体なり。金箔の少し残る処も有。ひたもの其地を掘究めて、円き木を又得たり。是紛れもなき仏首なり。此儘置べき物ならずと、川端の地に小藁家を建、当村は大概天徳寺旦那故、寺に談じて桜栄と云道心者を置守らしむ。依て村の支配なり。此桜栄、諸方勸化し、其頃知頭海道に住す仏工某に再刻せしむ。或は京の仏工とも。此僧死して庵を守る者なし。茲に石丈と云僧、道行堅固にて、九州に下り豊後の府内にて乞焉となり、山野に住居し、後老年行脚して長州に渡り、是より托鉢し国々経歴し当国に來り、此浜坂の水石潔く人煙稀に静閑の地と心とまり、此草庵に立よる。折節無住なれば、村人此僧を見て、何国へ通る人と問へば、諸国を巡る者と云。依て村人強て此処に留錫せしめ、衣食を送り、住せしむ。是元禄十年の頃。其後天徳寺の住持遷化し、繼席の僧なかりしが、世に名有石丈和尚、此草庵に隠れ給ふは幸なりとて云へ共、余り出世は同心なかりしを、強て請じて天徳寺へ進山せしむ。其後弟子高賢を庵主たらしむ。茲に水月の庵号はじまる。後、高賢は遍参し、惠林下の黙堂三嗣法し、黄檗派の僧と成、肥前平戸壺嶋城主松浦肥前守菩提処瑞嚴寺の住主となる。扱此観音の脇土は、元禄十年、願主ありて同仏工の作なり。縁起は古本尊大同二年延鎮僧都の作と有。何の書に伝へしにや。今……の頃、天徳寺隠居せんとて……莊嚴を加へ堂宇広大なる。大応寺と号す。

昔、当藩中に森元交と云名医有。是南部越後と云大剛勇士の末子也。

妾腹とも云。其頃切支丹の党に名医有。邪宗は信ぜね共、彼は蛮国入故、日本唐にも未不聞名法を知たる薬を相伝へまほしく、医道の執心より其党に入たるなり。江戸に訴人ありて、因州切支丹の党ありと云ける故、森元交江戸に召捕られ、猶も同類の白状せしめんと拷問す。元交を仰臥し、臍の上に土を塗り、其中に炭火をおこし攻問し処、火氣盛んに煙薰り出ける時、元交「あゝ合点ゆきたり」と云て息絶たり。「やれ、何か云たり」と火をしめし水を濯、人心ち付たる時、奉行人「汝今あゝ合点行たりと云けるはいかなる所存」と問ければ、「さればこそ斯の如く堪がたき苦みは心ともせず、思はず、息の通ふ限は医道のみ我心とせり。死て後此心止なん。今火責にて年来の氣海の灸の効を不審に思ひしが、腹中に火氣通りし時、始て得悟し、責苦を忘れ覚へず合点行たりと申ける」と答へたり。毎に獄中にて療治の奇効多かりける。彼此医道の執心のみ邪党に入たりけるを決白しければ、差て子細有者ならずと、其後は拷問なく、後出牢せられ、江戸に放。人にて心の儘世上を徘徊しける。かほど一芸に思ひ入らざれば上手には成べからず。元交が因州に居たる邸は、今の袋川堤内堤きわに有し。其処を元交が入戸と云。土手内左の方屋敷の内土手際に元交が墓と云有。一本の榎の樹を植、此処の竹木、方七八尺が間、竹木伐ても忽ち崇ると云。然れば元交御免の後江戸に居、旧主に被下て本国に歸り、帰依の寺もなければ後園に埋たるならん。

○慶安寺前々住康譽和尚の咄に、父老の曰、昔隣寺光明寺は湯所端に有。寺中に八幡宮有。往古は当社の神宮たり。いつか今の宗旨

と改む。即本尊阿弥陀如来となれり。是八幡宮の神体なり。故に今も此本尊は奇特^{キドク}あります由。昔、此神宮寺にて始て常念仏^{カウデウ}興行し、袋川端にて一千日回向を勤らる。依而今も千日の井戸と云名残れり。又、羽田弥左衛門屋敷^{ウラ}裏山下に少しの水溜り有。水ぬるく、是此処昔温泉^{フンセン}有。年代^{シレ}不^ズ知。遠き昔のことにや。百三四年以前、此処より湯桁^{ゲタ}の腐木^{クサレキ}出たると父老の咄^{トシヨリ}なり。頼て湯所の名あるなり。

○秋田仁兵衛^ニの嚙^{ハナシ}に、御城内中阪^{ケイ}の桂蔵坊^{ベウ}は狐の名と思へり。或老人の曰、昔桂蔵坊と云山伏、死て中阪に葬^{ハナズリ}たる也と。今も五輪の残有。何れか不知。是池田備中守の御在城より以前のことなり。扱宮部善祥房^{ベゼン}主也^{バウ}昔は比叡山^{エイ}の衆徒なり。以前の名を不^{アラタメ}改、善祥房と称して秀吉公に従ひ、武功勝れたる人也。鳥取城攻の時も、円護寺^{エンゴジ}より塩谷周防守が籠たる雁金尾^{カリガネ}の砦^{トビデ}を抜て、本城と丸山の出城^{ハイレウ}ノ城尾との中間を取切て、諸將に勝たれば、落城の後、鳥取城^{久松城}を拝領^{ハダ}せらる。薩州軍の時も勲功有て感状^{カン}を得たり。軍中にて衆を励ます為メ、山伏を召具^ガし勝軍の祈祷^{キトウ}をなさしむ例あり。元来衆徒なれば、桂蔵坊も善祥房に従ひ当処^{シタガ}三来り、城内に居住したるや。城山の中に、山伏井戸と云水溜り^{タマ}、大井なり。此人など住居せし時掘たるものか。

○竹嶋山天満宮は、昔は立川村中に有。近来、野崎喜平治家の向^{ヤナギ}敷垣^{ヤフガキ}したる百姓の住地を天神邸^{ヤシキ}と云。此処天神の旧地なり。又竹嶋山の近処、天神田と云田有。昔の御供田^{ヨクウダ}と云伝ふ。永禄年間、山中鹿之助^{コシキ}、甕山より出勢して鳥取城攻たる時、城主は武田美作守孝^{タカ}

信在城也。其時、此辺を焼亡^{セウボウ}し通りし故、社檀^{ダン}民家一時に灰燼^{カイジン}となり、後軍静まりて人民も住居して再建の企^{クハダテ}すれ共、神体なければ彼是日数を送るうち、当村の牧童^{ウシカイゴ}深草^{フカ}中より一ツの天神の御首^{ミガシ}を拾ひ帰る。人々に見せるに、紛^{マギレ}なき天神のみぐし也。時に村老に神託^{タタ}有ば弥信^{イヨシノ}仰し、直に今の竹嶋山下に祠を建立す。竹嶋の名は、御国替^{ガヘ}の後、備前の竹嶋に住ける法意^{ハウイ}と云修験者^{シュゲン}、当国に來しに、当藩^{カチウ}の馴染^{ナシラ}人に引^{トメ}られ此処に住し、終に竹嶋の法意と云より名となれり。山中が焼亡は永禄九年八月朔日なり。其頃より天神の祠有し。古き事なり。

○邑美郡田ノ嶋村は、昔山名家代々国屋形^{クニヤカタ}と称して布施^{フセ}在城の時、此所^{コト}■^{ヲフテ}手口、但州伯州へ通り、布施城下より但州へ行道也。故に昔は繁昌の地なり。当郡の大村^ニ而田嶋千軒^{ヨビ}と呼けり。村中寺院多く在て、今の毘沙門堂を多門山今瀧寺と云。即八幡宮の神宮にて、神宮寺とも云。八幡宮の旧地も村中に有。此寺の物とて、古き経の切^キレなど持伝^{キウキ}ふ。旧記は燼滅^{ジンメツ}したり。只屋形弥三郎豊次、武運長久を祈^{イリ}し護摩^{ゴマ}の仏具^ゴ有。施主武田又五郎と銘^{メイ}あり。古物也。武田は若狭^{ワカ}の武田より別れたる家^ニ而、流浪^{ルラウ}して当国に來り、布施^{フセ}の屋形の家人となり、武略の者にて家老まで立身し、鳥取の城代と成けるが、名城に籠^{コメ}て逆心を企て、布施^{フセ}の屋形とたたかひ数度戦ひ、屋形の一族武田が為に大半戦死せらる。稻葉武談に記^ス。其時に田ノ嶋は布施の追手^{ヲ、テ}なれば、寺も民家も不^シ残兵火に燼滅^{ジンメツ}し、暫^{シバ}く野となりぬ。是永禄年間なり。依而昔の宮社も神宮寺も断絶^{ダンゼツ}す。只、寺

邸と云名のみ残り、其後民も屋舎を立テ居住す。田ノ嶋の名再び起れり。于時慶長元三月、頼賢と云密僧、伯州より但州へ通るとて当村に止宿しける、其前夜、村人に夢の告有て、放光奇瑞を見て、昔の御手洗井の内より、一寸八分の多門天の像を得たり。是の本尊也。此事を頼賢に告て留錫せしめ、一草庵の開基とす。当村に山根万作と云者、是を随喜し、草庵を創立し本尊を安置す。頼賢は又諸国行脚に出られて、後、継席の僧もなく村の支配と成。後幾人か庵主を置たれども、歴世の次第も不知。元禄年中、行□と云浄土宗の道心を置く。于時諸方に勧化して草堂の修理す。又新に三尺壺寸の毘沙門天を彫刻し、彼小像を仏軀の内に込て、後今の福寿院と云修験を請じ居らしむ。此僧因伯を勧化し、二間四面の堂を新二建る。漸く享保十五年^{庚戌}成就し、入仏供養夥しかりし。

高原市兵衛先祖高原佐介は、剛武の名あり。河野一族なり。慶長年中迄田嶋^{ヲレウ}代々押領す。此時天下一統の御治世^{トウ}にて、切取とて独立することならざる故に、輝政公播州御入国の時、佐介御幕下に属せんことを願ふ。神妙也とて、田ノ嶋を高三百石知行下され、御船奉行を務けり。大坂に高名有て、宰相公より御感状下されしと。

鳥取久松城之事

天文十年、山名家八世治部少輔豊治早世の後、從弟^{イトコ}左衛門佐豊時次男豊頼の子、左馬助誠通と云人、但州山名家へ頼を入れて、彼家の指揮^{シキ}仍て、布施屋形を相続す。仍而次郎誠豊の一字を請受誠通と号す。于時、国中静ならず、戦争止時なし。偕但州山名誠豊死去、

其姪右衛門督祐^{カミサテ}豊家督す。仍て昔の好み薄く成、誠通と不快の事も有て、境を争ひ、既に諱を文通と改ル。弥但州と矛楯を争ひけり。兩國互に透を窺ひ、岩井口^{イハノコ}にて戦争ある。其後、小山近辺の農民を竊に語ひ導を頼み、反て農夫の謀に落入り、大勢敗走し帰国す。依て溝口農民中^{ミヅグチノミナト}感状を下さる。如斯敵より毎度攻寄来れば、老臣共日夜怠慢なく軍議区々たり。茲に布施天神山城郭は、山低く平にて地利なし。仍て鳥取久松山に砦を構へ、其外諸処に防禦の用意せんと、即ち天文十四乙巳二月^{ニハツ}鍛初有て、国の老臣田原某奉行す。是国中第一の名城となる。偕布施近辺には、徳尾の上なる新山砦を築て、中村伊豆守居す。是松上山ノ末有富谷の山鼻^{ノビ}にて、布施の往還よく明かにて、斥候第一の要、其外吉山、足山、釣ノ山^{ツノノヤマ}、正木ケ鼻^{マサキノハナ}に砦を築けり。斯る処に、天文十七^{ミナモト}申年、敵方より閑者を以て窺ふ折節、八上口^{ヤチノミ}に戦有て、人衆少きを視て、俄に軍勢推寄ければ、誠通自ら防戦すれ共、多勢なれば、忽討死しければ、城に火をかけて落城となる。是、申年崩と云。偕も俄に暗夜の諸臣、迷惑し、子息両方を守立テ、「布施を堅固にせん。此上は但馬屋形を敵にしては叶まじ」と、彼旗下に属し、和議ヲ調へ、即ち右衛門督祐豊入道宗詮の弟九郎豊定を守護代と而布施へ請じける。其頃、巨濃郡岩常谷二上の城、虚しく在けるが、国侍乱暴度々なれば、邑民可然城主を乞ふ。依て但州より祐豊弟^コ幼少^コ入出石宗鑑寺^{ニハツ}還俗させ、三上兵庫頭と号し、当城主となる。依て国中静謐なり。後十年、豊定卒去、息源十郎豊数統て主護代となる。斯て誠通子息加冠元服し、舍兄源七郎、舍弟次郎殿と号す。各聡明英智なり。茲に山名代々の旧臣武田又五郎は、執政吐握の才器なり。父豊前守共国中の政務、諸

方の砦を築く事数あり。即久松城も築。定番各相勤けるが、諸士に談合し、「忠勤第一の場合なれば、我居住し堅固に守るべし」云。諸士も同意す。やがて入城し、外堀を穿、壁を高くし、櫓を建、籠り居る。従是布施屋形を蔑にし、諸士を語らひ己が旗下に招、武器を諂ひける。偕、嫡男某十歳なるを、人質とし入れたれば、之を奪取べき謀を考へ、その頃とて市と云盲人有。鳥取の者、布施へも出入す。元来不敵の者なるが、此盲人を竊に語らひ、「汝、稚子を盗歸らば、恩賞厚く与ん」と云。どて市、弟子を連て布施城に到り、難なく幼主を奪と取歸りける。相図ラ以て士卒共疾より受取歸る。彼盲人共は、布施の追手に捕られて斬らる。従是双方度々戦争有ける。斯て高信内々にて弟武田又三郎を高草郡鴨尾城村に籠をきける。又、岩常三上殿も懇志を通じ、布施と不快の由を云。本意を遂なば国の屋形と称せんと言上す。弟源五郎を参らせける。三上殿合体し且源五郎が武名有を喜び、近侍につかわるゝこそ浅智なる。偕、布施には憤怒して、既に鳥取攻をぞ催さる。秋里・安長を先手として、中村伊豆守大将にて、天満のなわてを推出し、秋里大星の橋を渡り、湯所へ寄たり。鳥取は城寄せじと待かけ戦ける。既に城際まで攻入しが、大将中村討れて、寄手散々なりて、布施へと引取り。是より弥逆意盛んになりしが、徳吉將監・秋里玄蕃允・武田に合併せしより、只秋里を討て鳥取通路を開んとぞ戦ける。偕、國中八東若桜鬼ヶ城は矢部山城守代々在城、同郡日下部高平城は波多野隆平在城。同小畑城は小畑某・久世兵庫、私市場・白磯兩城は毛利豊元在城、丹比城は丹比孫之丞、八上郡大江は伊田兄弟在城す。法美は毛利・梶原、智頭は用瀬一族佐治一類、氣多

海老名七郎・田公七良左衛門・矢田七郎、高草は吉岡將監、巨濃郡山田安芸守・羽尾某、高野城吉見兵部等、各数代の国侍威彼下知に従ひしかば、援兵を出すべきなれ共、各我封疆堅固に守りける。或時、又徳吉口より天満繩手を布施城へ攻寄んとす。抑天神山の城郭は後二湖水、東二湖水を掘入回らせ、輒く寄ことなし。南は卯山なり。又八王子の平、正木が鼻二高櫓を建たり。斯て戦火花を散す処、寄手の勢より山田甲斐とて大剛力進み出たり。城兵中より藤村玄蕃と名乗て立合たり。玄蕃は貳十余の若武者、弥次郎殿近習なり。甲斐は六十余の老武者也。血戦に及びしが、終に甲斐が膝の辺を突留て玄蕃勝たりける。又大石某と云者、度々戦功有て、堅陣の中も堅横にかけ回り戦けるが、佞臣の讒言を信給ひて、さしもの忠烈無二の臣を敵内通有と欺討したりける。斯て此度は寄手負色にて引取り。田原・水瀬・桜井など追かけ、亀ノ甲の石橋辺にて暫戦相引ぞ成ける。斯て布施は鳥取征伐も事不成、始終如何と思折から、氣多方も野心の者多く、伯州は倉吉三山名小三郎、羽衣石二岩倉二小鴨、南条等、各透を窺ひける故、老臣等評儀有て、源七郎殿俄に氣多郡鹿野城へ移住し、賞罪正しく治りける。然共此殿若年にて、心剛智深と雖好色の性にて、彼邪智深き高信、是を察し計略を廻し、或二八ばかりの美婦を尋出し、遊舞を教へ、氣多へ遣し、殿へ出仕致させけり。素より、事成れば恩賞あらんの約束なり。偕、源七郎此美女に迷ひ、日夜宴を催し、寵愛深かりける。近臣の中、岩村某是を疑ひて、毎度諫言すれ共聞入給はず。或夜酒二酔給ふ折から、美婦鴆毒を酒二入進ける故、終に死去し給ひける。素より悶絶し給ふ有さまを、彼岩村視て、是姦謀此美婦が所為なりと知て、頓て彼

婦を斬殺し、自ら刃腹切て、殉死をしたりける。哀なりける事。君臣の骸は水谷回竜寺に葬埋す。斯て布施は、源七郎殿卒去にて、闇に燈なきの憂あり。鳥取は、謀計成就すると喜び、急ぎ攻寄時なりと思へ共、堅固の城故、一計を設て、先釣山を攻る体に見せて不意を討んと、先、鴨尾の武田又三郎と牒合せ、近辺合力の勢二三百並三巨濃勢と、吉成口より赤池の渡へ向ける。釣山より之を見て、出勢し、河を渡さじと互に戦争す。終に多勢故川を渡る。此時鴨尾の手勢馳来るに、前後の敵難防と釣山勢は引退、続て武田勢推寄たり。此時布施より、如案、「釣山は少勢也、後詰せよ」と弥次郎殿乗出し給ふ。森下四郎左衛門侍大将にて二百余人、大間邸の上鍋山にて軍の体を見る。多治見三斤候を出したり。双方闘の声を揚、血戦す。弥次郎殿若年故勇給ふを、森下暫くと諫止ども、聞ずに一騎駆、多治見をさして進討給ふ故、皆々多治見山を下り、有留谷を上り、釣山の向山勢揃す。武田は城西へ回り、両軍近く攻寄、城兵も出んとすれ共不叶。武田多勢三布施勢少し色見へ、西をさして崩れ行。斯る時に武田方の伏勢、宮谷の上谷奥に、森の中より起出て、崩行布施勢を引包て討ける故、度を失ひ散々に敗北しける。弥次郎は後れて多治見の西山に出給ふに、前後敵計りなれば、遁る方なしと思はれるにや、馬を下り腹を切て死給ふ。森下は、敗軍を集んとする処に、敵寄来れば、布施城へと引返す。斯て殿の討死を聞、皆忙然と千悔す。諸、弥次郎殿、乱軍中に馬蹄となり給ふ、其処に葬埋し塚を築きける。哀哉。年未だ廿二の花、忽草露のはかなき名のみ残し給ふ。是多治見の西、谷道より東、窪く平地なる処、後、神靈悲憤の解ぬにや数度怪異ある。或は風雨烈しき夜、馬乗

甲冑にて空中を駆回る貌なり。見て村民皆恐怖し、行人稀になりける。後静謐なりて、其処を改革し、西方山上に五輪を置、社壇を建、祭祀頻繁の礼を行ひ、八幡社に順じ、本高、新村の氏神とす。後は亡霊崇り給はず。人の尊敬を悦給ふにや。諸も布施と三上殿、同胞親戚を忘れ、強盛を争ひ、一家の滅亡を悦給ふ故、閨牆の怒甚しく戦伐止ことなし。是併武田が姦謀に迷ひてなり。三上殿但州より移住の時付家老たる房井土佐守某が、諸事仕置致せし処、彼武田源五郎が寵に誇り、万事彼を用給ふ故、旧臣皆憤りぬ。中にも房井三上を退去、竊に布施へ参奉仕す。豊数悦喜し、従是三上を亡す謀を企らる。斯て夜中に船を調、三百人許打乗、加路より岩本川口へ推寄、一手は久松村より、一手は房井を大将とし、川を越、道竹城の乾の方へ回り、搦手よりかゝる。三上殿、二上城は深山路嶮しく不便なりとて、道竹城を築、居住し給ふ。依て、寄手夜明に岩本の川霧に紛れ、搦手を思図に回さんと計ける。態と少勢にて備ける。城は、俄ごと故驚て騒動し、櫓より臨見て、川を渡さば悪しとて、川端にて合戦す。三上殿も出て厳しく防戦し給ふ処に、思よらぬ城後より鬨声を上たり。早城下迄攻上れば、城兵進退度を失ひ引包となる。殿は士卒に先立退去し給ふ、道を失ひ、深田に馬を入給ふ。敵兵近く追来れば、終に咽を斬て落命す。源五郎は城を守居けるが、斯と聞、一度落去せんとする処、敵兵近付ば、終に切腹したりける。布施勢は早く引取帰ける。豊数喜悦限なく、尚も鳥取攻せんと勇れけり。斯る処に、豊数風と病発し、追日重く成て、終に卒去し給ふ。遺言にて、弟豊国を主と備ける。近來豊定卒去より、源七郎、又豊数殿まで、皆早世し給ふ。是布施の衰微哉と、各感歎せぬ者もなし。

併豊国武略の良将なり。是豊定の次男、母公は管領細川右京太夫高国入道常桓娘也。器量世に勝れ、大力武勇の性なりける。諸も長臣森下出羽守ト改名、中村大炊介、用瀬、北川、田原等儉儀して、但州二方郡長井城主長殿息女を入興有ける。其頃、武田が暴威盛んて、可討時ならざりき。豊国、種々智謀を以て諸士を招かれけるが、茲に但州二方郡阿勢井城主塩谷肥前守は、高信妹婿たりしが、不快の事を聞、布施より合力を頼みければ、日頃の親みを翻し、内約をぞしたりけり。武田と疎遠なれば、高信憤りて、終に一戦に及んとす。既に嫡男又太郎、次男与十郎、同鶴尾城主同又三郎を大將と而、老臣西郷因幡守は城留り、嫡与五郎、軍司其外国侍、大江の伊田・小畑某・秋里・塩見・高山・高野の吉見等、都合八百余、海陸二手より、元龜三壬申八月、但州へ推寄たり。諸も阿勢井城に此事聞へければ、用心嚴重にて、同郡二里七釜城主田公筑前守、同城主三宅肥前守を語らひ、兼ては不快なれ、同意して、人衆を出し後詰せんと約しける。斯て寄手は無二無三に攻上りけるが、城の内より大石大木を投出し、烈しく戦ければ、寄手案外に負色めく処に、七釜の兩勢、後より俄に旗を上、鬨を揚げれば、因幡勢思寄ぬ敵故肝を消、あはてふためく内、敵ひたゝに攻寄る故、皆落支度と成ば、尚も追討せられ、又農夫に討るゝも多かりき。武田又五郎は浜坂にて討る。弟与十郎は尚逃延、丘の上三乗て彼是する処、農夫多勢竹鎗・棒にて討取ける。斯て甲冑具器を奪取、骸は父老共其処村の前に葬埋けり。是武田が愛子にて十六歳の美少年也と。其外一族国侍も過半討死し、残少く返りける。是己が家運の栄を驕傲し、他をあなどる故、斯衰敗に及ける。是より高信一族、忠臣を一時に

失ひ、後悔臍を咬に到りける。茲に山中鹿之介幸盛は、元來出雲阿蘇、後梅臍を咬に到りける。尼子右衛門尉晴久の家臣たり。晴久毛利元就と連年合戦に数度戦功有。然其終に富田城没落し、流浪し、尚も尼子家を守立んと一族勝久を語らひ、雲伯に一揆を起、雲伯の間に所々砦城を築と雖、毛利家より大軍にて追討す。依て勝久は京都へ落去、鹿介は丹後に潜に、尚一揆を起し海賊乱妨す。此時当国岩本川向日比屋と云所之旧地ナリに居住し、追々勢強大て、同浦富桐山城を築ける。于時居住の小屋を焼払しに、風烈しくて彼日比屋四五百家焼亡けり。諸も鹿介、当地領所なければ、思惟し、布施へ参向し、「味方仕、叛臣を討亡さん」と請ふぞ、殿も群臣と会儀し、鹿介と主従の約をなし給へば、鹿介、時日を不移武田を討取べしと、早速に領掌しける。今より幸盛忠功義名立んと、国人も従ひける。于時鹿介廿九歳、性強剛、眼大に、勇猛の将と言つべき。面に髭多く牛の如く也。籌策智謀比なしと。乱妨奪掠を事とす。国中の神社仏閣の宝物珍器も、此時に焼滅せる物多し。扱、桐山城は辺鄙なりと引払、布施へ言上し、敵城近き法美郡国府、甕山二城を築、武備を調へける。高信云「我藩屏の内」に敵侵し入こそ無念なれ」と、透を窺けり。斯て同郡今木法華寺、杉崎亥子山、釈山倉岩皆々幸盛内通せり。天正元癸酉八月一日、武田は諸勢合四五百騎を卒し、甕山を取巻けり。抑、山四方嶮しく、たやすく登得ず。西方を漸上る処、城兵俄に打出ければ、終に山下迄曳退く。于時、法花寺今木山城主秋里左馬允、内約の如く山を下り、甕山の後詰をす。武田勢国府川を渡り戦へ共、終に負軍になり、本陣さして引退けるが、本陣も恐動する時に、城兵百五六十人拔連討出せば、弥負色見へて散々逃退くを、追討せられ、岩倉

卯垣を過ぎ、鳥取まで追入ければ、死骸の山をなしにける。寔に敗軍の跡、骸道を遮りて、高信も片息にて帰ける。是鳥取たのも崩の合戦と云伝。

去程に、高信は防戦力尽て、久松城に籠りける。豊国より城攻を擬られければ、鹿之介軍の指麾す。其勢は、中村大炊助、同源八、森下出羽守大將にて、鳥取へ推寄ける。斯て城兵能防戦すれば、輒く攻破られず。難なく外郭を破れば、皆本丸に取上りて堅めけるに、寄手追上人も路險し。依て、天王ノ尾より山伝に城後に回り攻ければ、城兵大ニ驚駭、皆十神社の前に備て、爰を破られじと防ける故、終日戦ひ、頓て暮天になれば、寄手も引取、少々追討もあれど終に相引になり、夫より山下に陣して数日を送りける。斯て、城中も少勢故、徒に攻下りもせで、少々落支度をぞ仕たりける。偕、諸將俟義有て、高信に降参を言送りける。城兵も、所詮長籠城せんもよしなければ、先城を開降りて又籌策も有なんと、皆同意し、高信より幼少の女を質とし、家臣も各人質を出して開城す。高信弟又三郎の鴨尾の城につばみ居る豊国、多年の鬱憤を晴し、即久松城に転住し給ふ。天正元年の冬の事なり。諸人工商に至る迄、皆転住すれば、鳥取繁昌の地と成にける。是併鹿之介が功なれば、諸士の上置給ふ。幸盛つらく思ふやう、斯治平にて諸士と列座し、譜代旧臣の妬んことも如何と。所詮一身の働にて、諸城を攻大功を顕さんと、鳥取を立退けり。豊国再三留給へ共不聞。尚も国中を静めんと、法美をさして趣ける。後播州 城に於て討死すと。

○鼠倉 邑美郡大呂山麓岸根に有。昔鼠共集り、貴賤主従の貌、夫

婦の体、家財貯置、市井の様をなせる故に、是を鼠の隠れ里と号。此獸、仏家は黒の所屬、福分なりと。又伝教師も叡山に鼠社を勧請すとあり。

○道光坊墓 是摩尼山下源兵衛茶店の前、墓数区の傍に在。不動明王と誌。墳何世よりか旁壞れて、大白骨視ゆる。往古豊公久松城攻の時、本陣山太閤に摩尼寺住持道光坊を招き饗して、留主に卒を竊に遣し、寺に放火す。道光坊風と摩尼山の方を顧視し、驚天し疾走り返る。途に彼火を付し卒に往会ふ。即チ力戦して兵卒を投殺す。今其処麓ノ段トテ茶屋。後山口ニ数々卯ノ祠アリ。後に此処に入定せし由。大力僧なりけると。強勇也。

○桑名休德墓 摩尼山奥溪遙の松林中に石碑有。是光政公儒臣也と。碑銘ニ曰ク、指揮無敵、奪門截関、白雲出岬、清流下山。山陽採蕨、春風浴沂、全矣全矣、含笑而皈。月と水東へ流れ西へ行心を知れる人ぞ友なる